

芹沢光治良

第三卷・愛

人間の運命

人間の運命

第三卷・愛

芹沢光治良

# 人間の運命

## 第三卷 愛

昭和38年7月16日 印刷

昭和38年7月20日 発行

定価 360円

著者 ©芹沢光治良

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社 新潮社

東京都新宿区矢来町71

振替 東京 808

電話東京(341)7111~9

---

印刷・株式会社 金羊社 製本・神田 加藤興本所  
乱丁本はお取替えいたします。

© by K. Serizawa. Printed in Japan

人間の運命

第三卷 愛



## 第一章

有名な作家がわが家に集る学生に、月に数回、外国の詩を解説するというのは、容易ならぬ犠牲ではなからうか。その頃月曜日の夜、数人の東大生と一高生が、作家有島武郎の私邸の応接間に集って、ホイットマンの詩集「草の葉」の講義を聴いていた。

その応接間は、イギリス風だということだが、その広さ、家具類の落着いた豪華さ等、黒門の館きかたと同様に、この作家の両親の占めた社会的地位や所有した富の、表現あらわのようであった。壁の一方に、若い和服の婦人の等身大の写真がかかっているのが、不調和に感じられたが、写真の前に、ひくめの大きなテーブルがあつて、ふだんこの作家がそこで執筆をすることを思うと、亡き夫人を今も生きてるように、愛あつくしんでいるためだと、想像できた。若い学生に、この作家は真面目に話したことがある。

「長男の出産前に、産院へ入院する時、盛装して、写真をとりたいと言いましたね……その意こころをはかりかねたが、女がお産をするのは、軍人が出陣するようなものだからと言って……その時の写真です」

若い夫人像は妊婦を感じさせないが、美しいからであろうか。そう夫人が言ったのを、海軍の將軍を父にもつ妻らしい言葉として、すなおに受けとめて、写真をとらせたと、その時、作家は話した。しかし、その写真には、母となろうとする時に、若い妻が生命をも捧げるような覚悟をするために、輝く自己犠牲の美が、豊かににじんんでいるので、その作家の最も好きなのであるそうだが、その自己犠牲の精神が、夫人を若くして死なせたのであり、それには、作家にも責任があると、考えていたようだ。夫人が亡くなってから、転身して創作に自己を打ちこむようになったのも、夫人を生かそうとするからで、そのために、生きた夫人像の前で、創作をするのであるが、未熟な学生には、そう話さなかったようだ。

その夜、次郎がこの応接間に通った時に、作家はすでに集っていた数人の学生に、穏やかに話していた。話す時には、写真とテーブルに背を向けて、マントルピースの前に集る学生に、斜めに向きあうようにかけるが、マントルピースに瓦斯ストーブがもうつく季節であった。

「松虫草が好きでしたから、そう題名をつけました。この花は軽井沢にも咲いていますが、北海道で親しんだ花でしょう。淋しそうな野の花だが、どことなく高貴な感がかたじけなくするから好きだと、申していましたが、この花が咲く寒い風土が、体質にあわなかったのでしょうか……」

次郎が片隅の椅子にかけるとすぐ、その松虫草と題する文集が、横の一高生から膝へのせられた。夫人が湘南地方で、病を養っている時、作家の友人達が、病床を慰めるために書きおくれたものを、表紙をつけて一本にとじたというが、その友人が詩人や作家や画家が多いから、友情のこもった、すばらしい文芸雑誌の原本のようなものだ。表紙はまた、この作家が愛情こ

めて写生した水彩の松虫草である。それによって、次郎ははじめて松虫草を知ったが、こんなふうに、愛しあえる男女の生活こそ、結婚生活というものであらうと、その文集の頁を繰りながら、想像した。

七時頃に東大生が数人一度に部屋へはいって来た。会員が大体そろったところで、作家はホイットマンの詩の解説をはじめた。貴公子らしく端然として、身じろぎもしない。柔和な気品のある表情で、眸はテキストに吸いついている。低いけれど抑揚のある声で、アメリカ語の詩句を、一句一句よどみなく流暢に朗読する。一節朗読したあとで、ゆっくりした口調で訳出されるが、その坦々とした日本語は、書き写したならば、そのままみごとな現代詩になるような訳文である。

次郎はテキストのアメリカ語を追いながら、ちょっととした副詞や接続詞まで、あざやかにゆるぎない日本語になつて行くのを、いつも驚嘆して、これだから小説家になれたのだらうと、考えた――

しかし、その夜は心がみだれて、訳文について行けなかった。最後にはいつて来た東大生のなかに、兄の一郎がまじっていたからだ。

次郎は一年以上も前に、一郎が草の葉会員で、この会に出席していることを知った。新会員になれるように、是非作家に紹介してくれと頼んだが、その時、一郎は冷たく拒否した。

「つまらない会だよ。冬にはストーブがあり、夏には旋風機があつて、お茶と菓子子の御馳走が出るから、僕は時たま行くけれど……ホイットマンの詩の講義といつても、ただ訳すだけだか



ら、興味が無いよ。草の葉は出版するそうだから、それを読んだ方が、時間の経済だ」

本心ではなく、偽悪的な言辞をただ弄したのだとは、気がつかないから、次郎は偶像をけがされたようにひそかに憤った。当時、この作家は学生や若い人々から、時代の良心のように尊敬と信頼とを受けていたからだ。ようやくその秋石田の紹介で、次郎は会員になって、毎回待ち構えて出席しているが、それまで一回も一郎にあわなかったから、脱会したものと安心していた。それなのに、その夜、一郎はテキストも持たずに、講義の直前現れて、講義中、マントルピースの横に立ったまま、傍聴している。その傲慢、不遜な態度に、次郎は呆れるとともに、弟として、作家や他の会員にすまなくもあり、はずかしくもあった。

「パパお休み——」

突然小学校一二年生らしい少年がはいって来て、そう作家の方に手を出して、握手してから、写真に向って、ママお休みなさいと、おじぎをして、出て行った。作家の長男であるが、その挨拶が、毎回、二時間近い詩の解説がすんだという合図のようで、間もなく、菓子やお茶がはこばれて、講義がおわることになっていた。講義がおわると、一郎もストープをはなれて、大学生のなかの椅子についた。

いつも茶菓は豊富だが、茶菓の饗応をうけると、集った学生のうち、主として東大の法学部の者が、急に元気になり、話題を提出して、作家を中心に座談会のようになって、活発に論じあうのが、常であった。たいていの場合、経済問題や社会問題が、話題になったが、それもこの作家の関心が、あまり知識のないその方面に、激しく向いていたからのようだ。ともかく、

集る学生もホイットマンの詩の解釈よりも、座談の間に、この作家から、人生や社会について教えられることを、たのしみにしていた。

その夜は法科の三年生Aが、先輩の内務省の役人から聞いたとて、去る八月の米騒動について話題を提供した。

「——寺内閣が新聞に発表を禁じたために、僕は実情を知らなかったけれど、革命の前夜を思わせるような凄じい様相だったそうですよ。八月三日でしたね、富山の漁師のおかみさん達が米穀商を襲って、警官が鎮圧できないというようなことが、新聞に簡単にのったまま、その後、僕達は目をふさがれたけれど、すぐ京都と名古屋に飛火したように、騒動がおきて、つづいて、大阪、神戸、広島、和歌山と西日本の主な都会に、飛火して、それから福井、静岡のような中部日本の主な都会をへて、東京にまで伝わったそうですね。どの都会でも、米を廉売するように、米穀商や地方公共団体に要求するばかりでなくて富豪には、米の廉売資金にあてるために、寄付金を要求して、出さない富豪を焼打ちしたし、寄付した富豪の門には、寄付金額をはって、勝利のように氣勢をあげたそうですよ」

すると他の法科の学生Bが、やはり先輩の役人から聞いたと言って、加えた。

「どの都会でも、最初は個人的に義侠心の強い職人階級がアジテーターとして、活躍したそうですね……日本の都会でもバリ・コンミンのような事件が起きる可能性を、感じたそうですよ。でも、弾圧がはじまると、職人はすぐ降参したそうです。職人は威勢がいいが、組織的に弾圧と闘うという力がないし、上からの命令にはもろいところがあるからだ、言っていました」

が……労働者の多いところは、弾圧にも屈しないで、闘争したそうです。神戸では、川崎造船所の労働者や沖仲仕などが参加したし、京都府下では海軍工廠の労働者が三千人も参加したそうですよ。それより驚くべきことは、山口県や福岡県では、弾圧に來た軍隊に、炭坑労働者がダイナマイトを使って抵抗したそうですからね」

みな感動して森閑と聞いていると、大学生のCが言葉をはさんだ。

「米騒動というのは、農村の騒動だと思っていたが、都会の騒動だったのか」

「都会でさかんだったが、農村にももちろんあったそうですよ。騒動のやり方は農村も都会と大体同じ方法だったようで……小作人が、A君が言ったように、米の廉売、そのための寄付、米の無償貸与などを、地主や高利貸しや村の有力者に要求して立ち上ったそうですが、農民が半鐘をならしたり、太鼓をうったりして、それを合図に、棍棒や鍬などをもって集ったそうですから、凄じかったらしいんだ。そして、その要求に応じないと、家を襲って、火をつけたり、米俵や家財をうばったんですからね。その代表的な例が……甲府で、大地主の若尾家が、ふだん非人間的であるといつて、小作人から恨みを買っていたもので、一度に爆発したのですよ。ね、農民は米倉をおそつて、本宅には、消火ポンプで石油をひっかけて、火をつけたということですよ。たしかに、あの米騒動は地主制に対する脅威だったんだよ」

「寺内内閣が早く手をうって、報道を禁止したり、国庫支出して外米廉売の資金にしたり、警察をたすけるために、在郷軍人会や青年団や消防団を総動員したので、大事にいたらなかったと、先輩は話していたが、僕は不安を感じますね。陸海軍を出動させて、全国では六十カ町村

だそうですが、大衆に向わせたのですからね。兵隊が大衆に同情したり味方したら、一体、どんなことが起きたか、わからないでしょう？ 現に、京都府や兵庫県の村では、警察を助けるはずの消防団が、大衆に加勢して、警察の命令をきかないで、地主の家を襲ったそうですよ」

「死傷者もたくさん出たようですが、実数がわからないと、先輩はかくしていたけれど、検査した者は八千数百名だと言っていました……これだけ多数の検査をして、しかも、それが三府三十二県、三十三市、百四町、九十七村というように、全国にわたっていたのですから、革命前夜ですよ。僕もA君と同様、不安を感じるね」

「ね、A君の先輩とB君の先輩と同一人か」

そう他の大学生がきいた。

「ちがうさ。A君は内務省の先輩だろう？ 僕のは司法省にいるんだよ」

「僕は八月はじめに満州を旅行していて、新聞を見おとしたけれど……そのきっかけになった富山の漁師のおかみさんが、どうして米屋を襲ったんですか」

そう一高生が、質問したので、なにを問抜けた質問をするのだ、というように、みなな緊張がほぐれた。

「このおかみさん達の主人は、北海道や樺太方面へ出漁している貧しい漁師だよ。主人が留守の間に、米の値段が一升四十五銭にも跳ねあがって（十五銭から二十五銭ぐらいのものがね）食べられなくなったからさ。政府は外米輸入関税を撤廃しないし、シベリア出兵で多量に米の買付けをするし、米価が上るのはむりもなかったが……それに加えて、取引所で米の買占をし

て儲ける奴が出る、米の価が上るから売りおしりする奴も出る、というあんばいで、米が貧乏人の手にはいらなかったんだよ。貧乏人は正直だから、不作だったから絶対量が少ないものと思つて、飢えそうになりながら、がまんして、収穫期を待っていたんだね。ところが、目の前で、地主の米倉から、大阪の米穀商の手で、多量の米が船に積み出されるんだ。それを見たから、たまらない。漁師のおかみさん達は、頭に来ちまったんだね。それが八月三日の夜だったが、おかみさん達が三百人ばかり、餓鬼のように地主や米屋を襲つて、米の積出しをやめてくれ、米を安く売ってくれて、要求したが、聞き入れなければ、放火するぞ、皆殺しにするぞつて、脅迫になったんだよ——」

大学生の話の間中、次郎は作家の表情を見つめていた。作家は腕組みして悲痛な面持で聞いているだけで、一言も言葉を加えなかった。大学生のAやBが、どんなつもりで、今更、作家の前で、すぎ去つた米騒動を話題にするのか、次郎は理解に苦しんだ。米騒動の頃、石田の家でした体験が、それほど激しく彼の魂を揺ぶつたからだ。

石田の紹介で、草の葉の会員になり、出席して四回目であるが、いつも座談になると社会問題や政治問題が話題になったが、いつも全く抽象的なことばかりで、それを通じて、社会の見方や物の考え方を、この作家から教えられた。しかし、米騒動というような生々しい現実的な話題を持ち出すのは、それによつてAやBは政治的な態度を、はつきりさせようとしているのであろうか。尊敬する作家の前で、先輩から聞いたからとて、あの事件を、目的なしに、自慢話のようにするのは、不謹慎ではなからうか——

そう思って、作家の表情を見つめていたのだが、Aが一高生に説明する最後の言葉を聞いて、ふと次郎は考えた。米が一升四十五銭にあがったほんとうの辛さを、AもBも理解しないのであろう。質に入れるものもなくて、飢餓をたえるということが、どんなものか、知らないであろう。Aをはじめ、集っている学生は、すべて資産家の子弟であるから、米騒動という大事件も、彼等の生活にかかわりのないことで、ただの抽象的な知識にすぎないのかも知れない――

そう考えたとたん、次郎は緊張がゆるみ、吐息が出たが、次の瞬間には、一郎がまた無遠慮に質問するので、顔を硬張らせた。

「先生は北海道に大農場をもっていましたね。あそこでは、騒動はおきませんでしたか」  
次郎は息をのんで作家の顔を凝視した。

「いいえ、騒動はおきませんでしたよ」

そう、作家は静かに答えたが、考え深そうな表情で加えた。

「あの農場をいつか解放しなければならぬと考えていたが、今度の事件で、早く実行しなければならぬと、痛感しました。その時期や方法や、とくに、解放後の農家の問題など、よく研究してから、決定しなければなりません――」

「解放するというのは、農民に土地を無償で与えるということでしょうね」と、重ねて一郎が念を押すような問い方をした。

「そうです。解放することは簡単ですが、解放せられた農地を、どんなふうに農家が運営する

か、再び農地を失うことがないようにするにはどうすべきか、それも考えてやらなければなりませんので——」

「協同組合で経営するというのが、先生の持論ではありませんでしたか」

「農場の解放については、専門家に相談して、実行することになるでしょう」

「先生——」と、Aが高い調子で呼びかけるようにして、話した。

「僕達は、先生が経済や社会の知識が少ないからと、いつも謙遜して仰しゃっていたことを、まに受けていましたが、米騒動で、先生が知識が少ないどころか、先見の明があったと、敬服しました。夏前でしたが、ロシア革命が話題になった時、先生は仰しゃいましたね。労働者や農民が解放される時代が来る。この世界大戦も間もなく終るだろうが、後にはきっと、農民と労働者の時代が来る。労働者が解放されるばかりでなくて、労働者や農民が次の文化のいない手になるって……あの米騒動は、日本の農民や労働者が自ら解放しようと、全国的にふるいたったのですね」

作家は困ったように、悲痛な表情で答えなかったが、Bがすぐ、Aの話題に油を注ぐように加えた。

「あの米騒動では、或いは、食えないから、自然発生的にふるいたったのかも知れないけれど、日本の農民や労働者の意識のなかに、解放されようという共通な願望や意思がなければ、あんなに速く、全国的に伝わって、一度に事件が起きるようなことは、なかったですね。その点、先生は労働者や農民のこころをちゃんと予め感じとっていられたのですね。僕、A君とも

話して、感心していたけれど、先生の文学的精神というか、社会的良心というか、全くすばらしいですね」

しかし、作家はなおも黙っていた。すると、C大学生が言った。

「先生がいつか草の葉の解釈をなさりながら、作家も農民や労働者の側に立たなければいけないから——と、仰しゃいましたね。その時、僕はうっかり聞き流したけれど……先生は、農民や労働者が文化の創造者になり、文化の出来ない手になるという確信があるから、そう仰しかったので、何気なく、ホイットマンの詩に釣られて仰しかったのではありませんね」

「農民や労働者が解放されるといっても、長い歳月を要するでしょうね、とくに日本では……しかし、人間は本来、自由であるべきですし、文明の方向も、人間が解放され、個人の自由が確立される、という方向に、向っているのですから、必ず農民や労働者が個人的自由を獲得する日が来ると思います。そして、労働者がその力で創造するもので、文化に新しいものを加える日が、必ず来ます……その点、私のしている仕事など、減じる宿命にあるが」

「労働者の側に立たなければ……と、先生が仰しゃったのは、そのためですか。去年お書きになった『生れ出づる悩み』の頃から、その問題で、先生は悩んでいられたようにお見受けしますが、労働者の側に立つというのは、具体的にはどうすることですか」と、Cがつづけた。

「それは私の問題で、私が悩んで解決しなければならぬ人生問題の一つですが——」

と、作家は明かに、こうした話題を避けようとするのに、一郎が追求するように加えた。

「先生が悩んでいられるのは、結局先生が資産があるからではありませんか。労働者の側に立



つというのは、無産者になって、創作をするということではありませんか。それなら、何故財産を放棄して、無産者として出発しないのですか」

「母がある間は、母に苦勞をかけるから、それができないのです」

「お母さんが亡くなられば、財産を放棄なさるのですか」

「その時は、農場の解放と同様に、喜んでするつもりです」

無遠慮な一郎に怒るものと心配して、次郎は作家の顔を凝視していたが、表情一つ変えないで、静かに答えていた。その謙虚な態度に、次郎は息のつまるほど感動した。そして、一郎はともかく、AやBやCも、こんなふうには作家に話しかけるのだから、農民や労働者の側に立つような生き方を、将来するのであるかと、胸をあつくして考えた。同時に、その夏、浜寺の大塚の家で、米騒動について、大塚や田中と語ったまま、不明であったさまざまなことが、理解できたようで、自分も将来の出発点をここにおかなければならないと、必死に自分に言いきかせた。

その夜、次郎達が麴町の作家の館を辞したのは、十一時頃であった。国鉄の市ヶ谷駅へ歩いて出るのにも、いつものように、先ず東大生がグループになって話しながら行くあとに、黙って一高生が行ったが、間もなく、一郎が東大生達をやりすごして、次郎を待っていて、一高生の仲間からおくれているから、